

課題先進島・佐渡の自然と文化に学ぶ 浅島誠氏が顕彰講演

発生生物学の研究業績で平成20年度文化功労者選ばれた佐渡市旧金井町出身の浅島誠・東大副学長の受賞を顕彰する東大教養学部主催の記念講演会が1月7日東大駒場で行われたのに続き、首都圏佐渡連合会主催の顕彰講演会が2月22日、東京・文京区のホテルで開かれた。

駒場では学生、大学院生を対象に専門の「動物の形づくりと器官形成」について研究内容や発生生物学の現状などを紹介。佐渡出身者ら約180人を集めたホテルの講演では専門分野のほか「佐渡の自然と文化」と題し、生物学に目覚めるようになった高校までの佐渡生活の総括ともいえる思いを披歴した。

主題を一言で言えば、佐渡は学ぶ素材が豊富な課題先進島であること。グローバルな視点から問題に取り組み、世界や日本が直面する共通の課題に先行的解決を図るべきだ。生物や植物など自然だけではな



い。「日本の中の佐渡」と「世界の日本の日本」には①ともに海に囲まれた島 ②いずれも少子高齢化の傾向 ③若者の意識の文

化と情報の多様化 ④第一次、第二次産業の空洞化―という地理・文化・社会的共通点を持つ。これをどう考えていくか。日本の未来はここにかかっている。佐渡は日本の縮図であり、日本は世界の縮図だからだ。

佐渡時代には、イモリやカエル、昆虫や植物の採集に熱中する少年だったが、生物を学問として考えるようになったきっかけは、佐渡で滅びゆくトキを実際に目にしたこと。種の消滅と保存。「私の生物学は佐渡のトキから始まった」というのが口癖になった。

佐渡を離れてから、東京教育大、東大大学院で学び、ドイツ・ベルリン自由大学へ留学、横浜市大を経て東大で教職に就き、「胚誘導と器官形成」の研究の中で、中胚誘導物質としてアクチビンAを世界で初めて同定。これが世界的評価につながった。浅島生物学は、ES細胞、クローン、iPS細胞の研究と絡みながら、再生医療の先端技術へ適応し得る端緒を切り開いた。種の保存は新しい生命を誕生させた。

浅島生物学の基本哲学「カエルやイモリなど自然に学べ―彼らが先生」「情熱を越えた情熱パッションを持って取り組め―これは佐渡の自然と文化から体得したものである。

摩尼義晴首都圏佐渡連合会会長は「浅島先生の文化功労者選出は郷土の誇りであり、勇気づけられる」と祝意を述べ、佐渡出身の芸術家、宮田亮平・東京藝大大学長制作のイルカ像を記念に贈った。

(記 岩田雅)

想 随 ゆや夢飛行

佐渡市長 高野宏一郎

No 31

平成17年4月1日、それまで大竹副市長に続いて佐渡市の2人目の親松副市長が誕生したのはついこの間のような気がします。

当時究極の行政改革といわれる合併後の混沌の中で対等合併（新設合併）では今治市に次ぐ大型合併で、特に離島ゆえに750を越す事務事業（空港港湾からほとんどすべての産業を持つ）を管理する類似の団体はほとんど無いことから、佐渡方式の確立に不眠不休で業務に当たられました。

特に議会との調整や、合併後の秩序確立にあたっての手堅い手法は衆人の認めるところで。懸案の佐渡病院建設問題でも緻密で粘り強く対され、今年の着工が決定したことは氏の存在なくしては叶わないことでした。

残された空港の問題は佐渡市の最大の懸案ですが離島の医師確保のため、また疲弊した離島の企業誘致、観光振興等々のためには空港誘致が欠かせません。長く苦しんできた地権者交渉で最近目覚ましい進展があるのは同氏の誠実で献身的な努力の成果です。退任後もお手伝いを強くお願いしています。



親松副市長をするあいさつで議会

同氏は3月議会での最後の挨拶で「この4年間ですっかり髪も薄くなりました」と冗談を飛ばしましたが、佐渡市創設の揺籃期を支えた苦労のあかしは、髪の変化で歴然としています。今後は行政を離れた氏のご健康と、ゆたかな第2の人生を充分楽しまれますようご期待申し上げます。

(題字 高野宏一郎)